



図19 1号廊東側の散水（北から）

調査成果

廊 東西方向4基、南北方向4基を検出し、それぞれ直交し連結する。すべて版築の基壇が残存するのみで、上面は削平され、礎石や据付堀形などは確認できなかった。1号廊は発掘区の西南部にあり、南北76mを検出した(図18)。東西幅は7mある。基壇の両側には基壇化粧や散水(雨落)の磚が残存している(図19)。基壇の幅から推測して、両面ふき放しの複廊であろう。この廊は大明宮の中軸線上に位置し、規模も発掘区内でもっとも大きいことから主要な廊と考える。

塼 版築の塼を2基検出した。廊と直交する。塼の一部は廊の片側辺に接続し、単廊の壁を構成する。塼の壁面には白色あるいは赤色の層が残存し、発掘区から出土した壁面の破片には赤、緑、淡黄色の色彩痕跡があることから、廊の壁面には壁画が描かれていたと推測できる。

中庭 廊と塼に囲まれた方形の空間は大小各種ある。1号廊の東側に位置する中庭から、背に台座を乗せた象の石像が出土した。台座の上面中央にはほぞ穴があることから、上部には仏像(普賢菩薩か)があったと考える。このほか石灯籠の破片も出土した。出土品から推測して、この中庭には仏教関連施設があった可能性が高い。

排水溝 大小5基を検出した。最大の1号溝は幅約1.5m、深さ1.2mある。発掘区の東側を南北に走り、途中で屈曲しながら、発掘区の北にのびる。太液池に注ぐもの

と考える。溝の両側は磚を積み上げて構築しており、一部は廊の下をとる暗渠となっている。

井戸 調査区の北辺に6基の円形井戸を検出した(図20)。井戸の直径は約1m、深さは7～10mある。壁面は磚を円形に長手積みして構築する。井戸がある一帯は建物のある場所より地面が低く、井戸が集中していることから宮殿の給水施設があったものと考え。また、井戸の周辺には景石状の花崗岩が、他所から運ばれ廃棄された状態で出土している。

出土遺物 大量の瓦磚類のほか、陶磁器片、金属製品などが出土した。瓦類は軒瓦、丸平瓦のほかに、鴟尾や熨斗瓦がある。瓦は黒色で光沢のある黒色磨研瓦がおおく、緑釉瓦も一部出土している。方磚は蓮華文が主体で、ほかに葡萄唐草文や四葉文がある。陶磁器では白磁がおおく、そのほか黒磁、青磁、三彩などが出土している。金属製品は釘や装飾金具、開元通宝が少量出土した。

おわりに

遺物の整理は現在進行中で、遺跡全体の詳しい検討、解釈も今後の課題である。発掘にともない、出土遺物の調査も随時おこなっている。今後は両研究所が協力して遺物、遺構の調査研究をおこない、太液池を中心とする園林の状況を明らかにしていく予定である。(今井晃樹)

註

「唐長安城大明宮太液池の共同発掘調査」『紀要2003』、『同2004』。中国社会科学院考古研究所・独立行政法人奈良文化財研究所連合考古隊「唐長安城大明宮太液池遺址考古新収獲」・「唐長安城大明宮太液池遺址発掘簡報」『考古』2003年第11期。



図20 発掘区の北辺（西から）